

『#羊たちの沈黙 (The Silence of the Lambs)』(ジョナサン・デミ監督、1991年)をNHK BS(数年前に録画)で視聴した。アカデミー賞で主要5部門を受賞。邦題は誤訳で、「羊」ではなく「子羊」という意見がある。

米国各地で、若い女性を被害者とする連続猟奇殺人事件が発生。川へ遺棄された遺体から皮膚が剥ぎ取られていたことから犯人は「バッファロー・ビル」と呼ばれた。FBIの実習生Cは、訓練中、行動科学課のCR主任捜査官のオフィスに呼び出される。CRは、バッファロー・ビル事件解明のために、監禁中の凶悪殺人犯の心理分析を行っていたが、著名な元精神科医で連続猟奇殺人を犯した囚人ハンニバル・レクターは、FBIへの協力を拒絶していた。Cは、CRに代わって事件に関する助言を求めるため、レクターの収監されている州立精神病院に向かう。レクターはCに興味を持ち、ときに突き放しながら、協力するともちかける。レクターはCに揺さぶりをかけ、Cの記憶を引き出す。Cは保安官だった父親の突然の死、更に引き取られた牧羊家の叔父の家で子羊が屠殺されるのを目にし、衝動的に逃がそうとした過去を明かす。夜明けに来るだろう死を前にしても羊はただ動かず、必死にもがいても何もできない恐怖は、牧場を去り施設に入れられて大人になった現在でもCの心に染み付いていた。

一方、新たに上院議員の娘がバッファロー・ビルに誘拐される事件が発生したため、精神病院院長Tは、自身の出世のためにレクターを上院議員に売り込む。議員である母親は、捜査協力の見返りとして、レクターを警備の緩い刑務所へ移送させることを約束する。しかし、レクターは、移送の隙について警備の警察官や救急隊員たちを殺害して脱獄を果たす。

一方Cは、レクターが示唆した数々のヒントによって犠牲者たちの足跡をたどるうち、犯人と最初の犠牲者が知人だった可能性に気付く。CRたちも真犯人を特定して彼の自宅へ踏み込むが、そこはもぬけの殻だった。そして最初の犠牲者の関係先をあたるCがある住居を訪れると、住人の高齢女性ではなく、その知人だという若い男が現れる。暗い室内で裁縫道具の数々や蛾を目にしたCは、この男こそが犠牲者の皮膚でみずからの変容を目指すバッファロー・ビルであると確信し、彼は地下室へ逃げ込む。人質を殺害する周期に当たっているため、規則に反して単身で民家の地下室へ踏み込んだC。恐怖のなか暗闇の中でもがくが、間一髪で犯人を射殺し、人質を無事助け出す。

事件は解決し、その後、同期生たちと共に正式なFBI捜査官となり祝賀会に参加したCの元に、外国へ逃亡したレクターから電話が入る。声を潜めて応えたCに対してレクターは、彼女の心にある子羊たちの鳴き声が消されたかどうかを

尋ねる。そして事件解決と捜査官への就任を祝福し、「古い友人を夕食に呼んでいるんだ」(I'm having an old friend for dinner.)という言葉でT殺害をほめかして通話を終えると、ちょうど飛行場に降り立った彼の背中を追って人混みの中に姿を消した。

「バッファロー・ビル」のモデルになった実在事件はあるようだ。

「バッファロー・ビル」は複数の実在の殺人鬼を合成したキャラクターである。

主なモデルとなった人物

- ① エド・ゲイン (Ed Gein)
 - ・女性を殺害し、皮膚を剥いで加工
 - ・皮膚で衣服を作ろうとした
- ② テッド・バンディ (Ted Bundy)
 - ・若い女性を狙う
 - ・負傷を装って女性を車に誘い込む手口
- ③ ゲイリー・ハイドニク (Gary Heidnik)
 - ・女性を地下室に監禁

猟奇殺人（サイコパシー的殺人）の心理

1. 感情の希薄さ・共感性の欠如

多くの研究で、猟奇的な犯罪者には以下の傾向が見られるとされる。

「サイコパシー特性」

- ・他者の痛みや恐怖に対する共感が弱い
- ・自分の欲求や衝動を優先しやすい
- ・罪悪感が生じにくい

2. 支配欲・コントロール欲求

- ・他者を完全に支配したい
- ・自分の力を誇示したい
- ・無力化された相手を見ることで安心感や優越感を得る

3. 歪んだ自己像・アイデンティティの問題

猟奇的な行動の背景には、しばしば「自分が何者か分からない」、「自分を作り替えたい」という強い葛藤が潜むことがある。

- ・自己嫌悪
- ・自己像の不安定さ
- ・他者の身体や命を通じて“自分を作り替えようとする”

4. 幼少期のトラウマや虐待

研究では以下の関連が指摘されている。

- ・幼少期の虐待
- ・ネグレクト
- ・家庭内暴力の目撃
- ・愛着形成の失敗

これらが人格形成に影響し、共感性の欠如や攻撃性の増大につながることもある。

5. 刺激追求・快楽の異常な方向づけ

一部の猟奇殺人者は、強い刺激を求める傾向がある。

- ・普通の刺激では満足できない
- ・恐怖や暴力を“興奮”として感じる
- ・行動がエスカレートしやすい

『羊たちの沈黙』との関係

以下の点で現実の犯罪心理学を巧みに取り入れている。

- ・プロファイリング（行動から犯人像を推測する手法）
- ・サイコパシー特性の描写
- ・支配欲・自己像の歪み
- ・トラウマの影響

レクター博士の心理分析

レクター博士は複数の人格特性・精神病理の複合体として描かれている。

「知性 × サイコパシー × トラウマ」の組み合わせが、レクター博士を“現実にはほぼ存在しないレベルの怪物的キャラクター”にしている。

評価：★★★★☆